

2026年  
3月16日 No.1830



# 週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryo.co.jp>



潮流

## 教師の指導に還元できる調査に

公益財団法人スプリックス教育財団 調査研究員 秦 徳郎 三村杏奈 (下)

資料

### 目標・内容の構造化等及び「考え、議論する道徳」の実装に向けた学びの在り方について

——道徳ワーキンググループ

### CONTENTS

#### ▶ 2 潮流

教師の指導に還元できる調査に

秦 徳郎、三村杏奈(公益財団法人スプリックス教育財団 調査研究員) (下)

#### ▶ 5 解説・ニュースの焦点

○学習指導要領に地域クラブ活動も記載へ

○教員不足率は0.45%、3827人に

編集部

#### ▶ 8 学校の「アタリマエ」を問い直す

ネーミングは難しい

分類・類別のはざまを見落とさない

森 万喜子(教育アドバイザー、公立中学校 元校長)

#### ▶ 10 探究の学びをどう進めるか

情報活用能力育成の学習活動

編集部

#### ▶ 12 これからの管理職に期待されること

—管理職選考への対応

学び続ける管理職であるために

—情報収集と自己研鑽の実践的手法で

「見える化」する学校経営—

熱海康太(日本未来教育研究機構 代表理事)

#### ▶ 14 校長講話

来年度へ向けた成長のステップ

並木浩子(東京都・昭島市立昭和中学校 元校長)

#### ▶ 16 実践！ 校長塾

子どもを信じ

地域とつながり続ける③

金子陽子(東京都・板橋区立新河岸小学校 校長)

#### ▶ 19 資料

目標・内容の構造化等及び「考え、議論する道徳」の実装に向けた学びの在り方について

道徳ワーキンググループ

#### ▶ 33 Voice

#### ▶ 35 教育問題法律相談

発達特性のある児童と学校の安全配慮義務

佐藤香代(弁護士)

#### ▶ 36 学習指導要領のアイデアを実践する

「論点整理」ポイント資料で研修会を実施する

玉置 崇(岐阜聖徳学園大学教育学部 教授)

#### ▶ 38 私たち、子どもの全力サポーター！

「遊びをせんとや生まれけむ」

酒井道子(公認心理師)

#### ▶ 40 現場アタマでやろうじゃないか

見えにくい能力

石橋昌雄(立正大学社会福祉学部 元教授)

#### ▶ 42 変わる教育委員会

「こどもまんなか」を支えるのは、大人の笑顔—ある自治体の挑戦—④

福本 博(奈良県・天理市立南中学校 校長)

#### ▶ 44 現場仕込みのメンタルケア論

ケアとは

川上康則(東京都・杉並区立済美養護学校 主任教諭)

#### ▶ 47 BOOK

『忙しすぎる先生のための

校務×クラウド』株式会社ストリートスマート

『自分から学べる子になる

戦略的ほったらかし教育』岩田かおり

#### ▶ 48 自著を語る

『AI時代になぜ英語を学ぶのか』

町田 章(日本大学法学部 教授)

#### ▶ 50 こんなときどうする？ トラブル対応の処方箋

コーチングのエッセンスを

教育現場に生かそう

中村 藍(教育・福祉系ライター)

#### ▶ 52 マイオピニオン

「誰にも相談しない」子どもたち

田村節子(東京成徳大学 元教授)

# 潮流

公益財団法人スプリックス教育財団  
調査研究員

秦 徳郎さん  
はた とくろう

同  
みむらあんな  
三村杏奈さんに聞く①下



## 教師の指導に 還元できる調査に

秦 徳郎 静岡県出身。大阪大学 理学部物理学学科卒、大阪大学大学院 理学研究科物理学専攻 博士前期課程修了。2018年に同大学院・博士後期課程を修了し博士号(理学)を取得。同年、東京工業大学(現・東京科学大学)理学部物理学系に助教として着任。2025年より現職。

今後実施する国際調査では、  
計算テストによる基礎学力の実態把握と  
子ども・保護者の意識調査の他に  
教師教員の意識や指導方法も調べる予定だ。

### 基礎学力の意味を問いかける

——最近では、あまり基礎学力という言葉自体を見かけなくなりました。

秦 確かにその通りです。おそらくその理由は、人々の学び方や、「基礎学力」という概念そのものが変容するスピードが速まり、「基礎学力」という言葉が指す内容と、今の学びの実態が合わなくなってきたからだと考えられます。

私は昨年まで、東京工業大学(現・東京科学大学)で助教をしていましたが、大学生のレベルであっても、学ぶべき内容や学び方は、毎年変化しています。特に、昨今では生成AIの活用が当たり前になり、教科書や授業で分からなかったことがあれば、AIに質問すればすぐに答えが得られます。例えば、今の大学生は、数式変換なども画像で読み込ませて生成AIに投げかければ、即座に結果が得られる状況にあります。こうしたツールの普及により、「読み書き計算」という従来の定義だけでは、基礎学力を語るものが難しくなっています。

さらに、「基礎学力は大切だ」という一見自明なことも、それが「個人の研鑽」として大切なのか、あるいは「社会を支える共通言語」として大切なのか、そして「どのレベルまでを基礎と呼ぶべきか」といった視点によ

って、その意味合いは大きく異なります。ですから、今後私どもが毎年実施する「基礎学力に関する国際調査」は、単なる比較にとどまらず、「現代における基礎学力の意味とは何か」「国や文化によつてその捉え方などのような違いがあるのか」を改めて問い直す、重要な機会になると思います。

——今回の国際調査では、いわゆる「先進国」以外の国にも計算力の調査をされていますね。

三村 日本の子どもたちは計算問題が比較的得意です。しかし、先進国以外の国々では、計算問題の時点で課題を抱えている生徒が少なくありません。今回調査にご協力いただいたエクアドル、ペルー、エジプト、インドネシア、ネパールは、高い基礎学力を誇る日本の教育を高く評価しています。そこで、今回の調査の中で、学校単位で「TOFAS（国際基礎学力検定）」の受験にご協力いただき、日本の計算力との比較を実施しました。

小学4年生に解いてもらった計算問題では、例えば「 $\frac{1}{6} + \frac{5}{6}$ 」について4択で回答してもらい、分数や約分概念を理解しているかを問うものです。中学2年生に解いてもらった計算問題は、中学1年生までに学習した一次方程式の設問などがあります。これらの正答率を日本と比較することで、どの時点

から計算力に課題を抱えているのかを明らかにすることが出来ます。また、他国と比較することで、日本も得意分野や伸び代を見つめることが出来ます。

## 「格差の再生産」が連鎖する可能性

——今回、計算力と家庭の社会経済的背景についての分析もされています。

三村 学力格差の背景としては、他団体的なバックグラウンドがあることは、他団体の調査でも指摘されてきました。今回の私どもの調査では、計算力という基礎的な学力に注目して分析しました。その結果、すでに小学校4年生段階で「計算力と、世帯年収や教育費などの社会経済的背景（SES）は相関がある」ことが改めて確認できました。世帯年収や教育費だけではなく、保護者の学歴や家庭での本の数などの指標も計算力と相関がありました。

さらに、SESが高い家庭の子どもは高い学歴を持つことを期待される傾向があるため、その子どもがさらにSESが高い家庭を築くなどといった、「格差の再生産」が連鎖して起こる可能性が示唆されました。この傾向は日本だけでなく、アメリカ、イギリス、フランス、中国、南アフリカでも見られました。

——調査結果は、今後も分析を進めていく予定と聞いています。

三村 子どもの学力格差の背景に社会経済的背景があることは、学校現場の先生方も実感されていると思います。子どもに学習への意欲がある場合に、学校や学校外でどのような支援ができるかについて、分析を進めているところです。

例えば、「分からないことがあっても、誰かに聞けばよい」などの学びの解決法を持っている子どもは学力面でも伸びが期待されます。ですから、学校の先生方に対しては、「子どもが分からないことを、聞きやすくする学習環境づくり」を整えていくことが期待されていると思います。

スプリックス教育財団は株式会社スプリックスと協力して、学校とは基礎学力検定の実施や教材提供などを通じて連携しつつ、学校外では個別最適化された学習の提供を通じて子どもの学力を向上させるような、価値ある提言を模索していきます。

また、今後の研究課題として、保護者の意欲が低い理由の分析、SESを克服する勉強方法、ICTを活用した個別学習の浸透などを考えています。

## 学校現場での対応も調査予定

——基礎学力と保護者・子どもの意識について、今後はどのようなテーマで調査をされ

る予定でしょうか。

秦 今回の調査は、基礎学力に対する意識の現状を大まかに把握することを目的に実施しましたが、次回（令和8年実施予定）は、基礎学力を育成するために必要なファクターについて調査したいと考えています。

今回の調査では、子どもと保護者を対象に実施しましたが、基礎学力の育成という視点ですと、学校環境も含めた多角的な分析が必要で、具体的には、学校の教師がどのような指導をしているか、例えば宿題の頻度や学習方法の提示の仕方に加え、特に「生徒への褒め方」といった働きかけが、子どもの学習意欲にどう影響しているかを調べる予定です。さらにはその対応が保護者にどう伝わっているかも明らかにしたいと考えています。調査の趣旨をご理解いただき、教育委員会や学校の関係者にはご協力をいただければ幸いです。

— PISA（OECD生徒の学習到達度調査）やTIMSS（国際数学・理科教育動向調査）などの国際調査とは比較して、どのような特徴があるとお考えですか。

秦 PISAやTIMSSとの違いは大きく3つあります。一つ目は「内容」です。本調査では、あえて計算にのみ着目することで、学力の実態をよりシンプルに把握する仕組みとしています。二つ目は「対象」で、複数学

年を対象に実施し、学年ごとの比較分析を行います。そして三つ目が「頻度」です。学校現場を取り巻く状況は1年で大きく変わるため、PISAは3年ごと、TIMSSは4年ごとの実施ですが、本調査は年に1回の頻度で実施し、経年変化を詳しく追っていく予定です。

これらの結果については、すぐに公表して現場での指導に役立てていただけるよう、迅速に情報提供を行っていきたくと考えています。

— 基礎学力に焦点を当てて、学校での指導の実態や子ども・保護者・教師の意識の現状を踏まえた対応策の分析と提言には期待したいと思います。

秦 今後は、アンケート調査とは別に、個別のインタビューなどを通して、より細かい実態や課題も分析していきたいと考えています。調査ではおおよその傾向は分かりますが、国際調査となりますと、回答の仕方に、その国の国民性などが出ることがあります。例えば、日本人は「はい」「いいえ」よりも「どちらとも言えない」を選択するケースが多いと言われていますし、「大切と思うこと」を選択肢で問うても社会的望ましさバイアスがかかり、日本の学校教員は「全て大切」と回答しがちということがあります。

ですから、実際に学校現場などに伺い、学級

経営やグループ学習、子ども同士の「学び合い」の指導などの実態を踏まえた対応事例を収集したいと思います。そのことよって、アンケートの数値や回答傾向だけでは見えてこない、現場の工夫や葛藤といった「生の実態」を丁寧に掘り上げたいと考えています。そうした多角的な分析を通じて、日本の指導の優れた点を再確認したり、諸外国の事例から新たな示唆を得たりできるのではないかと思っています。

— 日本の教師が培ってきた職人わざの良さを再確認できる機会になりそうです。

三村 学級づくりなどといった、日本の教師の優れた熟練の技術は、言葉だけではなかなか継承が難しいものだと思います。しかし日本の教師にとつて、「授業研究」などを通して他の教員の授業を見ながら教師同士が学び合う仕組みが果たしてきた役割は大きいのではと思っています。また、こういった教師の研修の機会の有無や内容についても国によって違いがあるようでしたら、そうした点も分析したいと考えています。

公益財団法人スプリックス教育財団 || <https://sprix-foundation.org/>

